



# 宮 城 県 現代俳句協会 N E W S

2024. 1 No.49



## 俳句という器

嶺岸さとし

(海原・青岬)

二〇一五年の十二月、奇しくも開戦日に父は逝った。極度の近視のため兵役検査不合格の父だった。同じ年の十月発行の本誌巻頭に、当協会の元会長・浪山克彦氏が次のように記しておられる。「俳句は時事に適した器ではない―この呪縛めいた言葉によって、戦後俳句は『戦争』と向き合うことがすくなくかった」と。

「戦争」はもとより、時事や社会問題は俳句で扱うべきではないとする論調はいまだに多い。例えば、今年の蛇笏賞受賞の小川軽舟氏は「俳句はなにしろちっぽけな詩型ですので、立派な主義主張を持ち込むのは適しません。大いに訴えたいことのある人は、他の表現手段に行ったほうがいいでしょう」と述べていると言う（不勉強で孫引きです）。ここでは「主義主張」という言い方をしておられるが、俳句で戦争（反戦）を扱ったり、時事・社会問題にコミットしたりすることは好ましくないとお考えなのだと思う。

確かに、十七音の最短詩形である俳句は、そのような問題を扱うのに向いてはいない気がする。しかし、だからと言って詠んではいけないことにはならない。あえてその困難に立ち向かって句作すること、それでも表現しないではいられないという根源的な欲求こそ大切にされるべきではないのか。新たな表現、豊かな俳句は、むしろそこからしか生まれないのではないか。「俳諧自由」なのだと思う。俳句は小さな器であっても、「自然」だけでなく「生」や「世界」の全てを詠む対象としてよいはずだ。小さな器だからと言って、自ら俳句の可能性と奥深さを捨て去る「自主規制」こそ慎むべきなのではないだろうか。

ただ、その評価は、文芸作品としての評価軸でしつかりとなされる必要があるの言うまでもない。東日本大震災から十二年、環境・気候問題の深刻化、それに伴う激甚災害の増加、コロナ・パンデミック、ウクライナ侵攻等を経て、俳句が新たな表現領域を開拓して来ていることは確かであろう。

車にも仰臥という死春の月

原子炉を遮るたとえば白障子

戦場をドラマのやうに見て酷暑

高野ムツオ

渡辺誠一郎

浪山 克彦

### トンネルを抜けて故郷春一番

宮崎 哲 (小熊座)

秋田から会社に就職するため、蒸気機関車に乗って上京した。上野駅はお祭りのように人が溢れていた。東京での生活や仕事にも慣れていった。掲句は春休みに帰郷する時の句である。

### 子を三人産んだだけなり竹落葉

大坂 宏子 (小熊座)

このごろ私のまわりでは終活の話がでるようになった。友だちに会うと着物や洋服、本などを処分したという話が聞かれる。久しぶりに孫もまじえて家族みんなで食事をしていたとき、少し酔った私が「この年になるまで何もしてこなかった」とぼやいた。すると娘の一人が「私たちがいるじゃない」と言った。そう、忘れていたけれど私は子を三人産んだのだった。

### 竹の春金星へ行く古道かな

いしもた星人 (滝・俳句スクエア)

八月に内合を迎えた金星は、視界から消滅。暫くの後、明けの明星として復活した。十月には地球照を伴った織い月と共演。全天一番明るい星は常に人々の心を洗う。「釈迦牟尼仏言く、明星出現の時、我と大地有情と同時に成道す」。釈迦が成道したときも明けの明星が出現。人類進化のインスピレーションの源は金星の輝きにある。

### 表札は初代のままや万年青の実

佐々木 和子

塩竈市には老舗と呼ばれる代々続く商店がいくつもありま  
す。この句はその中のひとつの商店のことを詠んだものです。  
季語「万年青の実」が内容と合っていて効果的であると寸評を  
いただきました。月刊俳句二月号にて特選に選ばれたもので  
す。

## 一 句 一 葉

### 明け暮れのうがひ手洗ひ北塞ぐ

伊藤 俊二 (青岬)

コロナ禍の三年を経て、今年五月には二類から五類への引き下げがあり、日常の生活を取り戻しつつあるが、油断のできない状況にあるのは間違いない。用心のためのマスクや嗽、手洗い、三密をできるだけ避けることを、しばらくは心して続けていきたいと思う。身を守るウイルスとの戦いはこれからも果てしなく続いていく。

### 白南風や蔵の扉が開いている

黒河内 玉枝 (小熊座)

部材選びから祖父と建築に携わった蔵は、温度変化の無い味噌蔵が併設され、小さいながら機能的で美しく祖父の自慢でした。晴れた日には、戸口から差し込んだ陽が、磨き上げられた床に反射して軒先まであふれていました。狭い庭を挟んで蔵と向き合う母屋での父母の暮しは穏やかなものでした。俳句は時に懐かしくうれい邂逅に導いてくれます。

### ねんごろに靴を磨きて芭蕉祭

菊地 幸子

先年の芭蕉祭での特選、佳作に入れて戴いた句である。「駒草」の同人だった姑が生存していたなら共に喜びを分かち合えたかと思うと残念でならない。結社は違っていたがいつも一緒に参加していた。よく吟行もした。想い出はつきない。

### 風光る記憶のなかの瓦礫にも

関根 かな (小熊座)

東日本大震災から十二年の月日が流れた。直後はこの事実を自分なりの言葉で残そうと俳句に傾注できたが、ここ数年は震災の実感が深く伴わない俳句ばかりになっていた。震災を思う気持ちと言葉が近接に位置しない、遠ざかってしまう。句作全般においてである。基礎をやり直す。本を再読する。言葉の大切さを痛感する日々。

高橋 薫 (小熊座)

生きていくことも忘れて遠蛙

はじめて来た場所なのに覚えのある既視感。それは匂いだったり、音であったり、風の過ぎる皮膚感だったり、光に包まれる感覚。目を閉じれば、自分が今何処にいるのか分からなくなるような、世界で独りぼっちになるような、悲しいような嬉しいような、解放感に満たされる。ただ、自己陶酔が過ぎて匂にするのは難しい。

高平 佳典 (新俳句人連盟)

オール沖縄壊さぬように古酒甕

沖縄は復帰五十年を迎えましたが、今尚在日米軍基地の約七割が集中しています。それにもかかわらず、日本政府は貴重な辺野古の海域を埋め立て新基地建設を強行しています。埋め立て反対の民意は県民投票結果に明確に示されています。私はオール沖縄の一員の思っています。

菊池 修市 (青岬・牧)

牡蠣を剥く被災の頃を話しつつ

私の故郷気仙沼も現住の地の石巻も牡蠣の産地として知られ、秋の深まりが見られる頃、牡蠣剥きが始まる。どちらの町も震災では、大きな被害を受けた。ふとしたことで、当時のことが話題となる。まだまだ記憶は鮮明なのだ。今年も、「処理水」放出のこともあり、風評が心配でたまらない。

日下 節子 (小熊座)

麦こがし祖母の味して祖母を恋ふ

麦こがしは大麦を焙煎して挽いた粉で今で言えば「香煎」のことである。古くは江戸時代の頃から「麦こがし売り」が出現していたそう。戦後食べ物に乏しい頃に祖母は私達のおやつに麦こがしを食べさせてくれた。素朴だったが幼少の私は祖母の味が好きだった。今や飽食時代であればこそあの素朴な味が懐かしい。そして郷愁と共に祖母が恋しい。

一 句 一 葉

庄子 紅子 (牧・青岬)

冬の夕焼戦争は糸電話

今も戦争は続いている。戦争はたとえ終わったとしても傷跡は消えることはなく、一生背負っていかなくてはならないものとなる。糸電話は子供の玩具。紙コップと糸だけで相手に思いを伝えるもの。戦争と糸電話はあまりにもかけ離れているようだが、私にとってはこちらも人にとって儂いもののように思えるのだ。

菅原 はなめ (小熊座)

揚羽蝶字幕の裏を通り過ぐ

日本人は字幕を好むのに対して、海外では吹替が主流らしい。漢字やひらがなで構成される日本語は、英語に比べて読みやすいからだという。うちの居間ではよく海外ミステリーが流れていた。私は謎解きが苦手な子供だったけれど、字幕を眺める時間は好きだった。事件が解決したあと、字幕裏を横切った蝶の姿を妙に覚えている。

坂下 遊馬 (小熊座)

うつし世に無灯のクリスマスツリー

昨年末、ロシア軍の攻撃により停電が起きているウクライナへの連帯を示すため、世界各地でクリスマスツリーなどが消灯された。折しも仙台市内では冬の風物詩「光のページェント」が開催されていた。十月にはパレスチナ問題が再燃し、今も多くの無辜の命が失われている。金子兜太の言葉「人間は性悪なもの」を痛感する。

総会案内

日時 令和六年三月二十四日(日) 午後二時十五分  
参加費 千円 二句出し句会(席題)  
\*場所などの詳細は後日葉書でご案内予定です



# 宮城県現代俳句協会「夏季研修会」

令和五年七月三十日 仙台市青葉区中央市民センター

(席題「二番町」又は「二番丁」、「門」)

〈高得点11句〉

- |    |                 |        |
|----|-----------------|--------|
| 7点 | みんなの声遠く聴く二番丁    | 星 節子   |
| 6点 | 二番丁通りの古書肆水打つて   | 坂内 佳禰  |
| 6点 | 砂灼けて鬪牛場の堅き門     | 田村 恵子  |
| 6点 | 留守中の交番大暑の二番町    | 小田桐妙女  |
| 6点 | 門限はなけれど虫のすだくなり  | 庄子 紅子  |
| 5点 | 炎昼のビルは魔神よ二番町    | 嶺岸さとし  |
| 5点 | 二番丁猛暑の中の旅枕      | 大坂 宏子  |
| 4点 | 校門の鎖されてゐたる炎暑かな  | 浅川 芳直  |
| 4点 | 禅寺の大門潜る白日傘      | 日下 節子  |
| 4点 | 門柱のなき炎天の文化横丁    | 坂下 遊馬  |
| 4点 | 補聴器に紛れ込む蟬二番丁    | 丸山千代子  |
| 4点 | 百日紅騎馬武者住みし二番丁   | 平山 北舟  |
|    | 山神は女神なるかな葛の門    | 鈴木 隆   |
|    | 狛犬と並ぶ日傘や仁王門     | 大久保和子  |
|    | 門を出て暑さ百倍のうげんの赤  | 新藤 綾子  |
|    | 運動会出番少なし退場門     | 菊池 修市  |
|    | かなかなの止み門前に朝日さす  | 佐藤 みね  |
|    | ベートーヴェン流る日盛の二番町 | 小野寺みち子 |
|    | 校門脇の店に氷旗ありしころ   | 伊澤てつを  |
|    | 夕虹や復元されし南大門     | 佐々木和子  |
|    | 夏蝶の二番町より目を開く    | 渡辺誠一郎  |



## 研修会に参加して

伊澤てつを (小熊座)

炎暑の七月三十日(日)に、仙台市青葉区中央市民センターで宮城県現代俳句協会の研修会が開催された。

最初に、渡辺誠一郎会長の講話があった。テーマは「『俳句旅枕―みちの奥へ』の視座 東日本大震災 十二年が過ぎ」。大震災に遭遇しての経験と、その後、実践し現在も続けてきていることについて話された。

会長は、震災直後は俳句を作ろうという意欲を失いかけたが、それでも「小熊座」の編集にも携わっていたので、なんとか句作に取り組めたということだった。その後、「災害は繰り返しやってくる」、その災害を詠むことでの自分の立ち位置を問いたいと考えるようになった。震災を詠むことは、まず「鎮魂」、そして自分がよって立つものへの学び直しと考えた。学び直しということでは、芭蕉の「おくのほそ道」や正岡子規の「はて知らずの記」などを市民とともに読書会を始めた。また、震災句と写真の展示を行い、一般の人に見てもらい、自身の表現が世に耐えられるかどうかを確認した。さらに、俳句の未来のため「塩竈ジュニア俳句コンクール」に取り組んだ。すでに六回目となっている。

さらに、「生きるとはこの世の不条理を受け止めること」を踏まえ、震災のみならず、広く東北(みちのく)の先人や歴史を訪ね、様々な物語にふれることで、震災後の自らの物語を綴ろうと考えた。その一つとして「旅枕」を挙げられた。これは私の解釈だが、「歌枕」にあるいわば虚構といったものを超えて、実際にそこに行き、触れ、感じてそれを作品として昇華させる一つの手がかりとして考えたかったのだと思う。芭蕉は京の雅からみちのくを見たが、我々は足下からみちのくを見つめたい。その例として、多賀城の荒脛中神社を挙げられた。アラハバキ神は諸説あるが、おそらくは土着の、蝦夷の神であったろうと。多賀城の国府は滅びたが、この神社はいまなお存在している。そこにみちのくの奥深い歴史を感じると思われた。

その後、出席者二十人による句会が行われた。席題は「二番町(丁)」と「門」、二句投句、暑さを超えた熱い句会であった。

## イマココ現代俳句―続・詩歌の音楽性

小田島 渚 (銀漢・小熊座)

青年部では、「イマココ現代俳句」というZOOMを利用したオンラインイベントを平日の夜、月二回の頻度で開催している。担当スピーカーが関心のあるトピックについて三十分程度話をした後、運営メンバーが中心となって議論する。参加者は議論をただ聞いているだけでなく、チャットなどで気軽に発言も出来る。黒岩徳将青年部長による『現代俳句』(令和五年十月号)の青年部活動報告に詳しいが、最新の句集や俳句甲子園等多彩で旬な話題も魅力である。私もスピーカーを担当し、詩歌の音楽性をテーマとして、水沢なおの詩と青本袖紀の俳句を取り上げた。

水沢なおの「美しい身体よ」は六頁にわたる詩である。身体「からだ」と原因を示す「からだ」のダブルミーニングとなる「うつくしいからだ」のフレーズが、意外性のある言葉の展開の中に複数配され、全体が調和している。「すべての芸術が(中略)音楽的にならうとしている」(時枝誠記)とすれば、詩は音楽のメロディとリズムの双方を十全に生かすことができるが、俳句は短いため、特にメロディにおいて詩ほどの活用は難しいと思われた。

しかし、青本袖紀の『like a ghost』(『俳句四季』令和五年四月号)では新しい可能性が示唆されている。十六句すべての句の横に、前書きの文字サイズで伴奏のような詩が添えられている。例えば、〈手がうつす杉の木立の雨の濃さ〉〈くちぐちをわたり名前が灰になる〉には、少しずれるが「石や木立のかたちをうつす。幻燈機。鉛筆を握りこめば名前がついて、それでもここは肌寒い。」の詩が付されている。句は一句の作品として、詩は詩として読めるだけでなく、十六句は十六行の一遍の詩として読むことが出来る。いわゆる五七五や切れからくる俳句的なリズムではなく、全体にメロディアスで重層的な声立ち上ってくる。青本のnoteでは、この作品を最後に俳句と決別すること、また俳句に詩ではなく、詩に俳句を並置したことが述べられているが、詩の音楽性が俳句にはなかった音楽性を引き出しているように思う。

水沢と青本の作品に共通する、希求する他者との結びつき難さは現代社会の精神性であり、それを表現する俳句がウェットなメロディを帯びようとするのは必然である。青本は俳句表現を追求することによって、俳句の音楽的可能性をも広げたと見えよう。

鈴木花明（滝）

稲の香や泉ヶ岳に手を合はす  
故山いる噓するがほどに稲かをる  
朝の戸を開くる即ち稲の香や

もともと四人の仲間と短歌を作っていました。短歌の冗漫にあきていたところ、誘はれて、句作を始めました。五七五の世界に短歌にはない魅力を感じました。虚子のへ去年今年貫く棒の如きものへに、俳句の心髓をおぼえ、一つの目標となりました。以来、伝統俳句の道を歩んで来ましたが、近来、現代俳句の難しさに興味をもち始め、かじって見ようと思いい入会しました。

千葉和珠（小熊座）

喫茶店出て夕焼けに溶けにゆく  
人魂も水に遊ぶさ金魚玉  
終わらない宿題空蟬をくしゃり

私の俳句との出会いはテレビでした。学校で習った程度の知識しかなかったので、じっくり解説や手直しを見ているとその表現の面白さに驚きました。それから俳句入門書を購入したり、歳時記を読んだりしながら少しずつ句作を始めました。初めて作った俳句が新聞の投稿に載ったのが嬉しくてますますやる気になりました。俳句を始めてから四季が深く人間の感性に繋がっていることを学びました。

## ようこそ、現俳へ。

新会員紹介  
(令和5年10月現在)

神野礼モン（小熊座）

五月富士手のひらにほらのせてみる  
羽ばたいて我も大瑠璃なら素敵  
娘の髪を三つ編みにしてソーダ水

俳句に触れる機会がなかった私が俳句を始めた切っ掛けは、知人の誘いに軽い気持で小熊座「きさらぎ句会」へ見学に行った事でした。皆様から優しく手解きを受けながら少しずつ俳句に興味を持ち始めました。句の数だけ苦しみ喜びがあり、最短詩形に詰っているドラマが完成。拙い句とわかっていても「もしかして」と期待を抱いたり欲深になったり、またそれも楽し。ハマってしまっただけです。

千葉悦重（小熊座）

書換えの視力検査や秋澄めり  
紅葉ちるちるや温泉掛流し  
秋日さす贈と名入りの掛時計

東日本大震災を経て、その二ヶ月後後定年退職しました。身の回りが落ち着いて来た頃に俳句の誘いを受けました。俳句に携わってからこれまでの何気ない言動も意識する様になり、日常生活にもじっくりと向い合う様になりました。句会の先生や先輩方の話を理解出来ない無知な自分を知りました。私の晩年を彩ってくれるであろう俳句を私の宝物として励んで行きたいと思っております。

第37回現代俳句東北大会（福島県）入賞作品

令和五年九月十七日 コラッセふくしま（福島市）

Ⅱ事前投句の部Ⅱ

▽青森県現代俳句協会長賞

なめくじり誰に嫌われても自由

▽岩手県現代俳句協会長賞

アイスクリーム皆善人の顔をして

▽秀 逸 賞

万緑や廃炉作業は闇の底

▽佳 作 賞

栗の花茶箱に父の従軍記

▽中村 和弘特選

少年の出口はいずこ山背風

▽高野ムツオ特選

巨大デブリ居座る廃炉梅雨の闇

▽小林 貴子特選

呼ばれたるやうに雨降る植田かな

▽後藤 章特選

水痕のように消えない夏の恋

▽千葉 芳醇特選

呼ばれたるやうに雨降る植田かな

▽成田 唯央特選

草稿の筆は進まず青葉木菟

▽名久井清流特選

合掌を解くやう蓮ひらきをり

▽さいとう白沙特選

浮いて来い海底蹴って浮いて来い

▽加藤 昭子特選

滝直下水は水なること止めず

▽片倉 俊秀特選

巨大デブリ居座る廃炉梅雨の闇

▽大類つとむ特選

廃校の大樹にひかる蜘蛛の糸

▽島山カツ子特選

鴉の巣私もかなり大雑把

▽佐竹 伸一特選

なめくじり誰に嫌われても自由

▽成田 一子特選

アイスクリーム皆善人の顔をして

▽鈴木 三山特選

七転び八起き八月九条よ

▽春日 石疼特選

水切りの石の切れ味初燕

▽成田 一子特選

なめくじり誰に嫌われても自由

▽鈴木 三山特選

被災地の黙の日月鱈東風

▽春日 石疼特選

トランポリンの一人は夏雲に乗る

佐藤真理子

伊藤 一男

小野 道子

永野 シン

丸山みづほ

水戸 勇喜

佐藤 みね

嶺岸さとし

大久保和子

佐藤 成之

大久保和子

伊澤二三子

日下 節子

齋藤 伸光

齋藤 伸光

齋藤 伸光

嶺岸さとし

丸山千代子

黒河内玉枝

佐藤真理子

伊藤 一男

小村 寿子

丸山千代子

佐藤真理子

水戸 勇喜

土屋 遊螢

永野 シン

▽鈴木 正治特選 「死ぬなよ」と帰省の奴が戻りゆく

▽宇川 啓子特選 栗の花茶箱に父の従軍記

▽神野 紗希入選 万緑や廃炉作業は闇の底

潮の香や日傘を閉じて拉致署名

アイスクリーム皆善人の顔をして

水より声取り出せば朝の虹

学びたかったと祖母のつぶやき山の藤

逆光にさくらの血管ふつと消ゆ

雲の峰並び立ちたる耕土かな

白南風や巨大壁画の防潮堤

万緑や廃炉作業は闇の底

花木樅赤子大きくあくびする

ゆらゆらと給油口から原爆忌

痛がつている蜥蜴の尻尾いかにせむ

万緑や廃炉作業は闇の底

蛭入れてより暗くなる蛭籠

アイスクリーム皆善人の顔をして

水戸 勇喜

丸山みづほ

小野 道子

丸山千代子

伊藤 一男

吉沢 美香

大久保和子

奥村 俊哉

小村 寿子

丸山みづほ

菊地 美紀

小野 道子

大久保和子

檜野美果子

黒河内玉枝

小野 道子

菊池 修市

伊藤 一男

第60回現代俳句全国大会入選作品

令和五年十一月三日 「東天紅」上野店（東京都）

▽赤野 四羽特選 ががんぼを打つ手が神になつてゐる

▽島村 正特選 馬鈴薯のやうな漢を好みけり

日下 節子

鈴木 三山

慶祝

二〇二三年度口語詩句賞新人賞

二〇二三年度口語詩句賞奨励賞

吉沢 美香

奥村 京水



# 俳句の肉声と肉筆はrockたるや!

## — 美術館rock



去る九月二十六日、塩竈市杉村惇美術館にて「美術館rock」が開催された。この日は、ロックバンドの他、フォークシンガー、美術家など、様々な表現者が、濃密で挑戦的なパフォーマンスに挑んだ。まさに「ロック魂」の爆発。ここで当会長の渡辺誠一郎氏は俳句の朗読のパフォーマンスを行った。

俳句の朗読は、ロックバンドの演奏をバックに始まった。しばらくすると舞台には、朗読する最初の一句、「涼風は馬の睫毛にはじまりぬ」が現れた。この句は、十畳ほどの白いシートに黒色のペイントで揮毫されていた。舞台上で登場した渡辺氏は、鳥の子の巻紙に墨書きした自作百句を一句二度、朗読した。来場者は事前に配布された直筆の原稿のプリントを手に入れた。朗読が九十九句まで進んだ時に、掲げられていた「涼風」の一句目のシートが切り落とされ、最後の句、「我いつか鯨を追って呆けたし」が現れた。これを最後に朗読を終えた。この場面の転回は、演劇的でスリリングであった。

今回の舞台では、改めて肉声の響きと黒色に揮毫された大書きの俳句の迫力に圧倒、魅了された。日頃俳句には縁遠い観客たちからも、非常に印象深い会であったとの声が聞かれた。このような企画はなかなかお目に掛かれないと思えた。俳句の新たな魅力とともに、肉声、肉筆の復権の大切さを、改めて考えさせる貴重な機会であった。(編集部記)



撮影・加藤貴伸

## 編集室から

◆『三島由紀夫VS東大全共闘 五十年目の真実』は、一九六九年五月十三日に東大駒場で行われた伝説的討論会の実際の映像を交えたドキュメンタリー映画である。討論会の一年後、四十五歳で三島は割腹自決したが、振り返れば、「三島由紀夫」を最後まで演じ切った表現者である気がしてくる。討論会での体の奥底から湧き出るような言葉の熱さは、俳句にも必要なものと考えさせられた。

◆九月、福島での第三十七回現代俳句東北大会に参加。神野紗希先生のご講演「生きた俳句、生きていく俳句」では、ウクライナの若手俳人や愛媛新聞の青嵐俳壇等の俳句を実感のこもった言葉で丁寧で紹介され、いま生きていることを私たちはあまり意識していないが、俳句を作ることによってそれを感じることが出来ると話された。四年ぶりの開催。コミュニケーションとは言葉だけで成り立っているわけではないことをつくづく感じた。コロナ禍で気づかぬうちに疎遠になった関係が多くの方にあると想像される。少しずつ交流を取り戻していけることを願う。(渚)

## photo俳句

### 鬼房の港を照らす冬の月

鈴木 三山

(表紙の写真／塩竈港)

発行所 宮城県現代俳句協会 令和六年一月十日発行  
発行人 渡辺誠一郎 編集部 坂下遊馬、小田島渚  
事務局 〒九八九―二三五一 宮城県亘理郡亘理町北新町三二―三  
坂下遊馬 方

電話 〇二三―三四―一七八一  
メールアドレス miyagikengh@gmail.com